

1988年度英語英文学研究室研究会要旨

第1回 1988年7月12日（火） 於 徳照館会議室

報告者 勝 山 貴 之

Chronicler 対 Dramatist

Shakespeare の *Henry VIII* における歴史的視点

1613年2月、James I の娘 Elizabeth はドイツ・プロテスタント貴族連合の指導者 Frederick 王子と結婚している。この英国王室とドイツ・プロテスタント連合との結びつきは英国の宗教的立場を明確なものにした。多くの英国民にとって、この英国とドイツの友好関係は、ローマ・カトリック教国の脅威に対するプロテスタント側の同盟関係として心強いものであった。こうした時代風潮を背景に、Shakespeare は *Henry VIII* の創作を手がけているわけであるが、創作の過程で、彼がその種本としたのは Holinshed の *Chronicles* と Foxe の *Acts and Monuments* であったとされている。これらはいずれも、その著者のプロテスタント的立場から英国歴代の王の治政を綴った年代記であり、その中において Henry VIII の存在は、法王の手先である Wolsey を倒して、ローマ・カトリックの迫害から英国を救う国民的英雄として描かれているのである。

このような劇の執筆・上演された時代背景、及びその材源の研究をとおして、Foakes, Felperine, Yates 等の批評家たちは、年代記の思想の反映を劇の中にも見いだそうとする。劇の中に描かれる Henry は、腐敗したローマ・カトリックの悪徳を体現する Wolsey の手から英国を救いだし、プロテスタント Cranmer に委ねる「神の代理 (God's deputy)」とも呼ぶにふさわしい存在とされるのである。

確かに、作品を作りだしている外的状況は、こうした読みを可能にしているが、同時に作品の中には、もうひとつの作者の視点とも言うべきものが、存在しているように思われる。Shakespeare は、大筋では材源に因っているものの、いくつかの重大な改変を行っており、この改変をとおして、ひとりの人間としての Henry の存在が観客に呈示されることとなるのである。

作品の中には、ローマ・カトリックの迫害から英国をプロテスタントの手に取り戻す「神の代理」としての英雄 Henry への賞賛と共に、己の欲望のためには次々と臣下の者の運命を操ってゆく王への不信、またそうした王侯に仕えることの悲哀が描かれており、この作品をうみだす重要な力となっている。従って、王への賞賛のみをこの作品に読み込むことは、作品を平板なものにしてしまうばかりか、そこに潜むもうひとつの作者の視点を無視してしまうことになるであろう。

第2回 1988年12月12日（月） 於 香柏館会議室

報告者 西 納 春 雄

『ホーン王』——叙事詩とロマンスのはざままで——

13世紀前半に成立したとされる作者不詳の中英語詩『ホーン王』は、「イギリスもの」として英語で書かれた韻文ロマンスの最古のものである。この作品は、頭韻詩から脚韻詩への作詞法の移行をしるすものとして重要な価値を持つばかりでなく、その中に展開される主題とその取り扱いの中に、叙事詩からロマンスへの変遷を凝縮していて極めて興味深い。

『ベオウルフ』、『ロランの歌』、頭韻詩『アーサー王の死』にその精神が代表される中世英国の叙事詩の伝統は、個々の作品の特殊性を越えた共通の特徴として、史実性、運命共同体としての集団の重視、共同体集団の栄光に収束する物語の筋の運びの合目的性、男性中心性、戦闘の礼賛、戦闘の果てに壮絶な死を迎える英雄の賛美に集約できよう。

一方で12世紀プロヴァンスの恋愛詩に発した宮廷風恋愛の主題は、北フランスに移植され、洗練され様式化されて、ロマンス（恋愛の主題を中心に据える、騎士を主人公とする冒険物語）の中に展開された。細部に関しては議論のあるところだが、叙事詩に見られる史実性、民族意識、英雄賛美は消滅し、その一方で、個人と個人の内面への関心、恋愛と女性賛美が重要な主題となった。物語の筋運びの目的性は喪失し、偶然の出会いや出来事がその展開を推進する。主人公の求めるものは恋する貴婦人の寵愛である。寵愛を得るための奉仕と、恋人の愛に適うものとなろうとする試練を経て、主人公の成長と人格の陶冶が果される。成熟したロマンスでは、女性への奉仕、封建領主への忠誠、キリスト教的敬神の美德を兼備した騎士道の理想が追求されることになる。

『ホーン王』には叙事詩とロマンスのこれら二つの伝統の主題が交錯している。物語はサラセン人の侵入によるホーンの父の殺害、ホーンの祖国追放に始まり、祖国への帰還と祖国奪回で終わる。この時サラセン人の侵入以来身を隠してホーンの無事を祈っていた母親の救出も成る。政治色と民族色の濃いこの主題を大枠として、その中に主人公ホーンとウエスタネス王女リーメンヒルドの恋物語が展開する。愛を告白するリーメンヒルドに、ホーンは自分の素性を隠して、自分は一介の生まれ卑しい孤児と答える。リーメンヒルドの思いの強さを知ると、その愛にふさわしい者となるとの誓いを自ら立てる。折から侵入したサラセン人と戦い大勝利を得るが、国王にリーメンヒルドとの仲を誤解されウエスタネスを追われる。アイルランドの地で再度サラセンの一角を全滅させる（この戦いの敵の頭目は実はホーンの父の敵だった）。長引くホーンの不在に乗じた隣国のモーディ王がリーメンヒルドに結婚を迫るとの知らせに、急遽帰国して彼女を救出する。さらに結婚の成就に先立って祖国スッデンを奪回し、その不在中に恋人をかどわかした従者フィケンヒルドからリーメンヒルドを再度救出する。こうしてホーンは騎士としてリーメンヒルドの愛に応えるに十分な存在であることを証明する。一方のリーメンヒルドも、ホーンの帰還をひたすら信じてモーディ王とフィケンヒルドの強引な求婚に耐え、その貞節とホーンへの忠誠心を十二分に試される。二人は早い時期に結婚の契りをひそかに交わすが、結婚の最終的な成就是、若者達の性急な熱情が、時をかけた試練によって互いに試みられ、公に認知された後のことでなければならない。

主人公の好戦的性格、仇敵への復讐、失われた領地領民回復の過程は、同時に恋人リーメンヒルドへの愛を全うするための試練の過程でもある。叙事詩の特色を残してはいるが、死を賭けて戦う民族の英雄の栄光の賛美ではなく、恋人への忠誠と恋人の意に適う者たろうとする若者の成長の主題が、『ホーン王』をロマンスとして、叙事詩の世界から訣別させている。